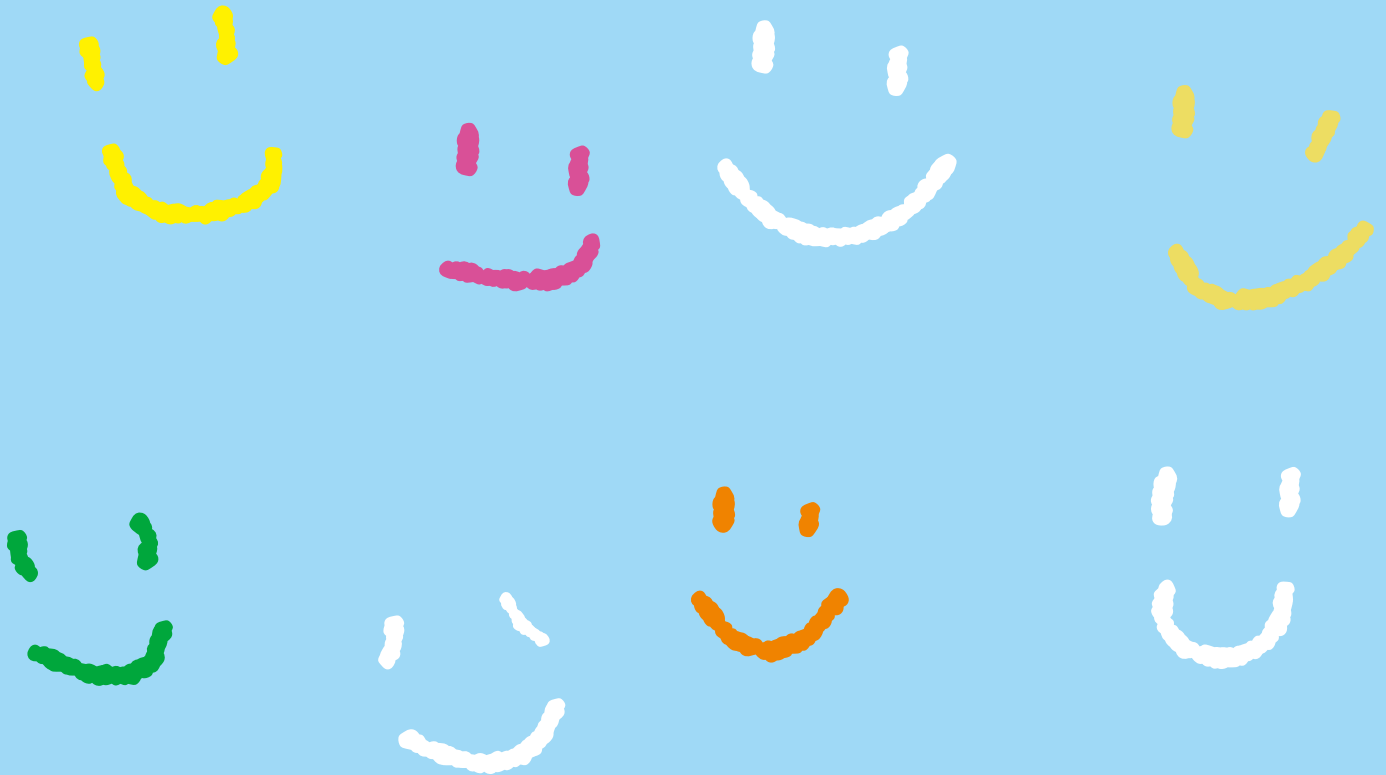


静岡県立大学「ふじのくに」みらい共育センター
牧之原サテライト キックオフ・イベント

人をつくり未来をつくる in 牧之原 報告集

相良港に
宝船がやってきた!







「ふじのくに」 未来共育センター 牧之原サテライト キックオフ・イベント

平成 27 年 7 月 12 日 (日) 13:00 ~ 16:40

牧之原市総合健康福祉センター「さざんか」ふれあいホール

一般参加者 108 名、スタッフ 22 名、合計 130 名の参加で実施されました。



講演「人をつくり未来をつくる
COC 事業」
鬼頭 宏

13:05

13:00 第 1 部

主催者挨拶
「静岡県立大学のCOC事業」
合田敏尚

10:30

牧之原市坂部地区
「絆づくり事業」を視察
キックオフ・イベントに先
立って、県大関係者 11 名が、
坂部区民センターを訪問し、
市役所地域創生課のご案内の
もと、坂部地区の「絆づくり
事業」の説明を受けた。

13:40

パネルディスカッション

13:20

スピーチ
「牧之原の未来と COC 事業」 西原茂樹氏

14:05

事業説明

「牧之原における COC 事業の展開」 津富 宏

14:10

皆さまへのご挨拶
「牧之原みらい交流サテライトの役割と地域の皆さんへのお願い」 東 宏乃



【問 1】あなたが思う魅力的な
牧之原とは？

14:35 第 2 部 対話タイム

「輪になって語ろう！
あなたと大学が一緒になってできることは？」



【問 2】
COC が牧之原にやってきて
その魅力はどう変わる？

【問 3】
魅力的な牧之原を実現するために
あなたは何をしていきたいですか？

16:25

インタビュー

閉会のことば 16:40
西野勝明

静岡牧之原茶「望」の呈茶



JA ハイナン & 牧之原市役所お茶特
産課のご協力により、牧之原産茶
「望」(NOZOMI) の冷茶サービス
を受け、参加者は、その甘くてさわ
やかな味を堪能した。

託児サービスを実施



子育て応援し隊 まきのはらバビー
(みらい子育てネット)にお世話に
なり、当日 4 名のお子さんを受け入
れ、保護者の方が安心してイベント
に参加されました。

第1部 トークセッション

● 合田敏尚

静岡県立大学食品栄養科学部教授・COC事業「ふじのくに」みらい共育センター・センター長



GODA
TOSHINAO

● 鬼頭 宏

静岡県立大学学長



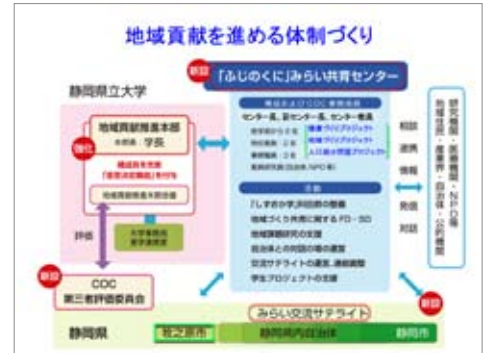
KITO
HIROSHI



静岡県立大学のCOC事業

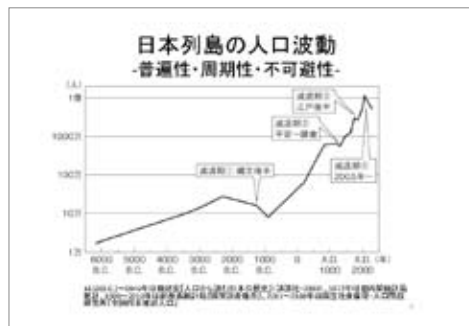
静岡県立大学は5つの学部と2つの研究院、3つの研究科を擁する総合大学で、在籍学生数は3000人弱です。昨年、文部科学省の地（知）の拠点整備事業（COC事業）に採択され、これから4年間、「しずおか」のために出来ることを、地域と連携して取組んでいきます。地域とともに次世代を育て（教育の連携）、地域とともに健康長寿社会・文化を育て（研究・社会貢献の連携）まいります。そのために、静岡市および牧之原市に「みらい交流サテライト」を開設させていただき、地域に貢献する教育研究活動を推進します。

特に、学生には、地域の課題を解決するために、地域とともに、世代・分野・職種を超えて、チーム活動を牽



引する能力「コミュニティワーク力」を育てていきたいと思っています。

そのために、「しずおか」を知り、ひとを生き、自分を生き、「みらい」を描いていって欲しいのです。また、大学の方では、地域貢献を進める体制づくりを進め、「ふじのくに」みらい共育センターを開設し、現場ベースでは、「地域づくりプロジェクト」「健康づくりプロジェクト」「人口減少問題プロジェクト」を柱に、3つのワーキンググループが立ち上がったところでございます。地域の協力が不可欠ですので、よろしくお願い申し上げます。



人をつくり未来をつくるCOC事業

人口減少問題は、今、日本のどの地域でも課題となっています。それを、マクロに捉えると、出生率が回復しても人口が安定するには時間がかかることがわかります。したがって、人口減少が必ずしもマイナスではないというビジョンを持つ必要性を訴えたいと思います。私の専門は歴史人口学ですが、そこから人口減少時代をとらえると、縄文期から現在までの4つの人口減退期の後には、それぞれ社会的イノベーションが到来することが発見できます。特に、2005年をピークとするそれ以降の人口減退期にあたる現在、OECDの「Well-being指標」調査（2014年）から日本の「幸福度」についてみると、日本は、「所得と富」のランクは高いが、「仕事と生活のバランス」についてはランクが低いことがわかります。つまり、高額所得を得るために働きすぎであ

21世紀文明をデザインする

- 国の長期ビジョン：出生率を人口置換水準（2.07）へ回復させ（2040年）、人口を安定化させる（22世紀初期に9000万人、1974年の国家目標「静止人口」を実現）。
- 県のビジョン（素案）：2020年 合計特殊出生率2.07＋県外人口流出停止→2060年 人口300万人を維持。

※

- 人口縮小社会への適応：社会規模のダウンサイジング（縮減）にかかわらず、快適な都市・豊かな地方を形成し、持続可能な社会を実現する（「自立・共生・循環・持続」的な集落・都市の再編成）。
- 新しい豊かさの実現：GDPの成長だけではない豊かさ（例：OECDのWell-being指標）。
- 超高齢化社会＝長くなったライフサイクルへの適応：高齢者の概念、高齢者の生活支援、高齢者自身の人生設計。

ることが、かえって人々の「幸福度」を下けていると言えるのです。また、日本人の長くなったライフサイクルに適応するためには、新しい価値観で生活する必要性があるのではないのでしょうか？

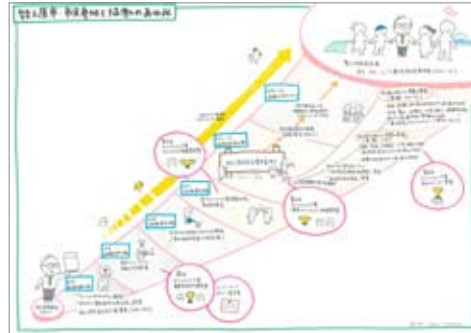
「人口増や経済成長だけを進めるのではなく、人それぞれがどういう幸せを追求するかを考えるべきだ。」と考える次第です。（また、人口減少社会への適応として、21世紀文明デザインを考える必要もありますが、社会規模のダウンサイジング（縮小）にかかわらず、快適な都市・豊かな地方を形成し、持続可能な社会を実現する（「自立・共生・循環・持続」的な集落・都市の再編成）ことについては、時間の関係上、パネルディスカッションに持ち越しました。）

● 西原茂樹氏

牧之原市長



NISHIHARA
SHIGEKI



牧之原の未来と COC 事業の展開

牧之原市は、今年の10月で市政10周年を迎えます。合併から今日まで、市民参加の政策協働を実践してきました。おかげさまで、市はマニフェスト大賞の様々な部門の賞を毎年のように受賞しています。特に、平成22年度からは、牧之原市自治基本条例の中に、市民との協働を制度化・明文化し、平成24年度からは、小学校区10地区を単位に、「絆づくり事業」を実施し、協働のまちづくりを推進してきました。特に、海岸部の5地区では「津波防災まちづくり計画」を作成、また、坂部地区では、「坂部地区まちづくり計画」を作成し、ゆ

るキャラ「さかべっち」も誕生しました。その結果、平成27年から5ヶ年計画で、第二次総合計画「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定するに至りました。それは、全国の市町に先駆けて地方創生を地で行く形になり、嬉しい限りです。また、この度は、県大のCOC事業を受け入れ、サテライトを本市の榛原庁舎に置くことになり、「絆と元気が創る、幸せあふれみんなが集うNEXT まきのほら」を将来都市像とし、健康長寿社会・文化の創造や、まちづくりなど、幅広い分野での県大とのコラボレーションが待たれるところです。

パネルディスカッション

● 西原茂樹

×

鬼頭 宏

×

加藤麻佑

×

寺尾華帆



市長と学長を迎えたパネルディスカッションでは、牧之原市出身の2人の県大生が、フロアからの質問を想定し代表する形で、モデレーター役を務めた。海拔約3メートルに位置する相良中学校出身の加藤麻佑さん（国際関係学部1年）は、大規模地震を想定した津波対策について、もし、津波が来たら、相良中学校や市役所相良庁舎、相良高校のある地区はどうなるのか？について西原市長に素朴に尋ねました。市長は、海岸部には命タワーや命山（いのちやま）の設置が決まっていること、命の問題を真っ先に解決することを約束した。

また、牧之原市に住み、県大に高速バスで通っている寺尾華帆さん（経営情報学部1年）からは、地域の人口減少が進むと交通インフラが弱体化するのではないかなど、切実な質問が投げかけられました。それに対して、市長、学長とともに、ユーモアも交え、新しいビジョンに向かって進むべきと強調しました。

特に、鬼頭学長は、「しずおか」の人は、ガツガツ稼がない傾向にあり、セカセカと生活もしていないことを指摘し、そ

れは「しずおか」の人が、現在の生活にある程度満足していることを意味していると指摘し、「しずおか」発の新しいライフスタイルや、生きる上での新しい価値観を創造していったらどうかと、締めくくりました。そして、最後、西原市長は、「20年後、君達はどのようにしているの?」と、2人の学生に尋ねました。2人は自分の将来についてイメージできにくかったのか、明確に答えられませんが、「一人でも二人でも、牧之原市の人口が増えることが、まちの発展につながる」、と西原氏は締めくくりました。

NISHIHARA SHIGEKI

KITO HIROSHI

KATO MAYU

TERAO KAHO

● 津富 宏

静岡県立大学国際関係学部教授・
COC 事業フィールドワーク
プロデューサー



TSUTOMI
HIROSHI



牧之原における COC 事業の展開

私は、自分が理事長を務める若者の就労支援の NPO 活動での経験をもとに、若い人を育てるには、計画の段階の始めからプロジェクトに参画してもらうこと、その中で実際に役割を担ってもらうこと、誰でも活躍できる場があることが重要だと、考えています。それについて、NPO の活動紹介の動画を交えて提案します。この動画には、老いも若きも、ともにあることの喜びと笑顔に満ち溢れています。人間そのものを尊重し、その人間をど真ん中に据えた活動ならではの可能性が伝わってくると思います。また、牧之原の地域の方へのお願いとして、これから地域連携コーディネーターの東が、学生を地域



につないでいくので、

- * 学生のやりたいことをまっすぐに受け止めてください。
- * 学生をかわいがってください。
- * しかし、ただの手伝いにならないでください。
- * 学生と本気で付き合ってください。
- * 学生がこれから住まっていく地域を支える人材を育てているのです。

と、お願いし、また、「学生が、牧之原で鍛えてもらった。牧之原は第二のふるさとだ、と思えたら、成功です。」という点を、締めくくりしたいと思います。

● 東 宏乃

牧之原みらい交流サテライト
地域連携コーディネーター



AZUMA
HIRONO



牧之原みらい交流サテライトの役割と地域の皆さんへのお願い

牧之原は、お茶畑を特徴とする美しいランドスケープを持ち、また、駿河湾の海と里山・牧之原台地が近く、市内を車で 20 分も走れば、どこにでも行ける良い意味での田舎です。

そこで、地域連携コーディネーターは、大学のアカデミックな「知」を地域の生活の「知恵」と結んでまいります。コーディネーターは、いわば社会の仲人（なこうど）で、異なる分野や多様な人と人を橋渡しし、ファシリテーター（促進役）、つまり、社会の産婆（さんば）として、

地域の皆さんが大事な何かを生み出すお手伝いをします。これまで 5 月と 6 月、地元の良さを発見する「地元学」という方法でフィールドワークを行ってきました。今後も、地域の皆さんである「土の人」と、よそ者である県大の学生や教員が「風の人」となって、「地元学」を展開し、地元の可能性を探り、課題別ワークショップなども実施していく予定です。主人公はこの場の皆さんですので、第二部の、対話タイムで、牧之原の良さを大いに語ってください。よろしく願いいたします。

第2部

対話タイム

「輪になって語ろう！」

あなたと大学が一緒になってできることは？」



牧之原市は、「市民参加のまちづくり」で有名な市町の1つです。小学校区10地区毎に、「男女協働サロン」というワークショップを開催し、津波防災や地域の「絆づくり事業」を展開してきています。市役所地域創生課が運営面のサポートをしながら、平日夜2時間、市民が「市民協働ファシリテーター」として場を取り仕切ります。そのワークショップの成果は、政策に反映されることもあり、市民一人ひとりが、まちづくりの担い手になる機会がひらかれている、とも言えるのです。

そんな地域特性を背景に、「牧之原みらい交流サテライト」のキックオフにあたっては、COC事業に関する講演だけではなく、牧之原市の市民と静岡県立大学の教員や学生が、共に語り合い、学びあう、共育（きょういく・ともいく）の場をセッティングしたら、面白いことが起こりそうだと、考えました。そして、市民参加は、これから長い未来を生きる中学・高校生を含む若い世代こそが軸になって展開すべきであるとも認識していたので、キックオフ・イベントの第二部は、企画段階から県大生が関わり、また、当日は、中・高校生も参加してくれるよう、市内の中学校や高校にも呼びかけを行いました。

その結果、当日、第二部の参加者87名の内、2つの県立高校から5名の高校生が参加してくれて、県大生13名とともに、計18名の生徒・学生が、一般市民に混じって、地域の未来を共に語り合うことができたのです。

そして、「対話タイム」の基本構成は、ワールド・カフェ方式で行われました。プログラムのデザインと、当日の司会・進行役（ファシリテーター）は、3人の学生、伊達沙月さん（国際関係学部2年）、土肥潤也さん（経営情報学部3年）、井上美樹さん（国際関係学部2年）が担当しました。

「対話のタイム」の場のルールは、

- (1) あきらめないで、自分が思っていることを伝える。
- (2) みんなの意見を頭から否定しない。
- (3) (1人だけが) 演説しない。

であり、市長の西原茂樹氏からは、牧之原市の「男女協働サロン」のルールに似ていると、好評でした。

また、ワールド・カフェでは、「人々が魅力を感じる牧之原を作るために、大学と自分ができることが見つかる！」という大目標のもとに、次の3つの「問い」が用意されました。

ステップ1:「あなたが思う魅力的な牧之原は？」

ステップ2:「COCがやってきて、その魅力はどう磨かれる？」

ステップ3:「魅力的な牧之原を実現するために、あなたは何をしていきたいですか？」

そして、5人～6人が1つの輪になって、「えんたくん」という円形のダンボールを膝で支えながら座り、17組の班を作って、対話が進みました。

後半は、場がノッてきたのか、テーマからはみ出て熱心に語り合う姿がみられたり、「問い」毎に班のメンバー編成は入れ替えられたのですが、老若男女が会場内を熱っぽく渡り歩いたりする様子は、見ていて圧巻でさえありました。

「対話タイム」の最後は、土肥潤也さんが司会進行役を担って、参加者にインタビューをしていきました。

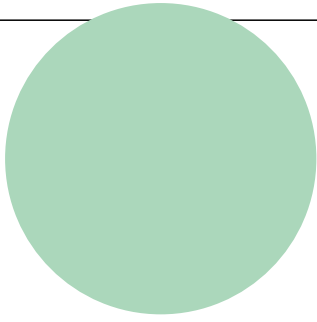
口火を切った女子高校生は、「地域には高齢者が増えています。そのお年寄りとの交流や話し相手として、小・中学生に頑張してほしいと思いますが、その両者の橋渡しをするのは、高校生の私たちの役割だと、強く意識できました。」と、堂々と語ってくれました。

また、NPO代表の女性は、「若い人と久しぶりに話すことができ、エネルギーをもらったような感じです！」と、高揚感を滲ませながら発言してくださいました。ある県大生は、「大学生になったら地域貢献をしたいと思っていましたが、これまで何をしたらいいかわかりませんでした。でも、今日、こうやって牧之原の方とお話をして、自分でも何かできるのではないかと、在学中だけでなく、自分の出身地域に帰ってからも何かできるし、していくべきだと、実感できました。」と語ったのです。最後に、坂部地区の地区長さんは、「今日はこんなに人が集まって、まるで、相良港に“宝船”がやってきたようです！私は農業をしているので、地域おこしのために売れる野菜の種（タネ）を探していますが、県大の先生や学生さんがこんなに大勢来てくれたことは、牧之原の発展のための“情報”というタネを持ってきてくれそうだとわかって、今日は感激しました！」と、大きな声で発言してくれました。

参加者一人ひとりの、「問3」への応答「これから自分が取り組みたいこと」と、「対話タイム」を体験して「感じたこと（感想）」については、次のページにまとめました。

第二部の最後は、市長の西原茂樹氏から、鬼頭学長と3人の学生ファシリテーターに直筆の色紙が贈られ、また、鬼頭学長は、第一部と第二部の間の休憩時間に、「相良高校のM君から質問を受け、人口停滞期の後には必ず革新的イノベーションが起こるのだと、語り合っ、学者の私の方が若い人から意見をもらって、刺激を受けました。良い出会いでした。」と、結びました。

総じて、牧之原の夏の高い空のように、とても明るいキックオフとなりました。（文責：東）



私たち、県大生ファシリテーター3人はこのキックオフに向けて、5月から準備を進めてきました。現在の牧之原市には、茶葉の買取価格の下落、人口流出、原発の隣接地での巨大地震と津波発生への懸念など、様々な問題が影を落としています。そんな牧之原にCOCがやってくことで、地元の人が「牧之原にどんな未来が訪れるんだろう?」とワクワクしてもらいたい、と思ってワークショップのプログラムを組みました。そして、参加者が牧之原についての理想を語るだけでは夢物語で終わってしまうので、参加者の皆さんが自分ができること、もしくは自分が明日からやっていきたいことも考えていただく時間を設けました。

また、今回は「えんたくん」という円形の段ボールをテーブル代わりにしています。「えんたくん」はグループの全員が膝を使い、等距離に座らないと安定しないので自然とグループに一体感が生まれます。このワークショップでは、高校生、大学生、住民の自治組織の長（地区長）、民間企業、各種団体・NPOの方など、それぞれの立場に関係なく、皆さん等しく「えんたくん」を支えてもらいました。それによって参加者の皆さんに「牧之原の未来はだれもが皆、対等な立場で作っていくのだ」ということを感じていただけたらと願ったのです。

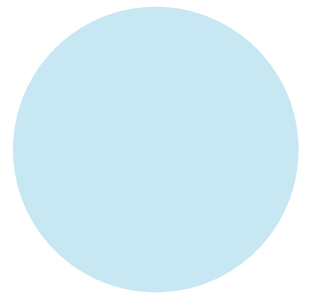
COCは今年度から4年間、地域と大学をつないでいきます。今回のキックオフの「対話タイム」が、その良きスタートになったのであれば、私たちはとてもうれしいです。(伊達沙月 静岡県立大学国際関係学部2年)

対話タイムは、高校生、行政関係者、主婦、お茶農家、NPO関係者、大学生、教員など、多様な世代・立場の皆さんが集う時間になりました。「牧之原の未来」というテーマで皆さんが楽しそうに話している姿は、まさに今回のテーマにふさわしい“牧之原の未来”を体現したような場になっている印象を受けました。

特に、イベントに来る前は、大人がたくさんいるし、何が起こるのやらと、不安感いっぱいだった高校生たちの、時が進むにつれて変わっていく笑顔は波紋のように広がり、対話タイムの場を暖かく包んでくれました。

若者は未来を担うとよく言われますが、「今」を担っていけると、この場が教えてくれたようにも感じました。

こんな素敵な時間に居合わせることができたことを嬉しく思います。(土肥潤也 静岡県立大学経営情報学部3年)



第2部 対話タイム

「輪になって語ろう！あなたと大学と一緒にできることは？」 ふりかえり・感想の一言集

第2部のご参加87人中61人の方から一言いただきました。その抜粋、47人分です。

■地域からと思われる方より 牧之原の魅力・若い人について

1.

大学生と話ができたことが大変うれしかった。牧之原の魅力を多くの人達に理解してもらいたい。老人を動かすことができれば、と考えています。

2.

牧之原の抱える問題点とそれに対する解決策を共有できた。本日学んだことを地元を持ち帰り、地域の地域起こしにも寄与したいと考える。県立大学と牧之原が協力していくことで、この地域の発展に役立つことがあるのではないかと考えた。

3.

県立大学の多くの学生が牧之原市に来て、他(外部)から牧之原市の良いところと課題をとらえて欲しい。



4.

行政と大学の連携の意義を、現状を把握しつつ説明を聞いた。若い力(考えや存在自体)に期待！見慣れた風景に新しい価値観を！若い学生の風がこの地に吹いたときに、新しいモノが生まれる気がする。



5.

若い人が一人加わってくれるだけで、大人の優しさ、思いやりが引き出された。周りで眺めていた次世代も声を伝えたい、数年後の牧之原。♡



6.

COCと連携して・・・若い人の発想力、外側からの魅力発見!!→市民の方の自信に。牧之原の魅力に気づく。雇用の促進 etc.・・・

7.

様々な人達と意見交換ができ、牧之原の魅力を知ることができた。COCには、若者目線、外から目線で、牧之原の魅力を見つけて欲しいし、一緒に考えていきたい。

8.

牧之原の地元の人々は、牧之原の住みやすさを感じている。地域課題と解決するためのきっかけは他からの働きかけが必要かもしれない。気づけば、地域の力はとても大きいので、必ず未来ができるだろう。居心地の良さが最大に魅力だろう。絆と元気。異質なものが出会って新しいものが生まれる。

9.

牧之原市の魅力を全員が何かしら感じているがそれを活用できていない。話し合いで自分の知らない牧之原市のいいところを発見できる。話し合いだけで終わらない話し合いを市民全体で広げて欲しい。

県大・COC事業について

10.

県大生と、これからどんどん楽しいことやわくわくするようなことに取り組んでいけたらいいと思う。取り組みの中で、地域も元気になっていく4年間であってほしい。

11.

牧之原には色々な人がいるなあ、来るなあと改めて実感。もっと出会っていきたい。魅力は、中にいるだけじゃわからない。「あたりまえ」の中に隠れているのかも・・・！学生・大学と一緒に牧之原を磨いていけたら、いいな。うれしい!!学生が来てくれた。企画してくれた。先生方が来てくれた。市民の皆さん。市役所。

12.

牧之原市を良くするための取り組みに感謝します。牧之原は空が広く明るく住みやすい。COCには、交通インフラを含み、多くの問題点を見つけてもらい、改善方向をもって欲しい。

13.

牧之原について多くのことを知ってもらえたことを嬉しく思う。いきつくところ「人」であり、今日の会も新たな出会いの中に、互いに良い影響を与えあって、自分自身をみつめたり、考えたりする機会になったことを感じる。牧之原市に将来に亘って住むよ、と話してくれた若い人の話に元気づけられた、ありがとう。



意見交換・これからへ

14.

牧之原のことを考える機会になった。若い人たちの「力」が必要。幅広い年代の人たちともっと交流や対話をすることができたら。

15.

地元のことをみんなで考えるよい機会になった。若い人たちの考えや発進力や力をもらった。話をまとめながら、良いまちづくりをしてほしい。

16.

脱・既成概念。→若い人などの意見から一步を。(目標)この活動への継続参加。(課題)市外勤務者の参加。(願望)スムーズな農地転換(耕作放棄地の活用)。



17.

今まで、出会ったことのない方々をお話ができ良かったと同時に、エネルギーの充電ができました！

18.

交通の便も悪く、不自由な街という事実をどうとらえるかが重要。そこにしか生まれない価値観は、とどこおった空気からは生まれない。若い学生の風を感じ、土と風が融合したときに新しいものが生まれる。ジェネレーションの壁を崩そう。

19.

話してみれば、共通する悩み、考え、問題意識等がある。その一方で、年代、立場が異なれば、違う意見もある。学生さん等の外部の視点が入って来ると、新しく見えるものもあるだろう。



20.

たくさんの年齢層の方々と、楽しく交流できて良かった、また、地域や地域の未来についてたくさんのことを考えてくれる人がいっぱいいることに気づけて、嬉しかった。

21.

話ベタの私にとっては、非常にいい体験ができたと思います。ぜひ、この輪を大きくできたいと思います。

22.

改めて、今まで、暮らしていた牧之原の良い点を見つめなおせ、今後どのように発展していくのか、話し合うことで、新しい発見があった。牧之原にはこれといって何もない。→何にでもなれる。お茶と健康に関して大学生のお墨付きをもらい、農業を若い世代に伝える。

23.

何も無い、何でもできる。牧之原に来て、今までつなげていなかった世代(高校～大学生とか)とつながっていくかもしれない。県大生任せではなく、「自分と」を考えていければいいのかな？

24.

県大生のパワーを生かそう。地域に根ざした活動に！自分達の得意技を生かせる機会をお互いに作るコミュニティにして行こう！継続は力なり、その条件を消さないような行動をして行こう。今日こんな機会を作って戴き、参加できて良かった。

25.

今日の活動を通して、高校生など、若い人たちがもっと積極的に地元をどうしていくべきか考えることが大切だと感じた。たくさん意見を聞くことができ、自分たちが地元をつくっていくという気持ちになれた。

市民協働など

26.

市政10年のあゆみを見て、市民と行政と近くなったように思います。(いい距離感)そこに県大生の事業が入って、より関わりやすくなるきっかけになるといいなと思いました。(若い人が入ると活性化するので。)何もないから、何でもできることはやります！楽しい関わりを計画したいと思いました。

27.

人口減少社会にあって魅力的な牧之原にするために、市の特性である「協働のまちづくり」にCOCによる様々な意見・考え方を注入し、さらに、一歩進んだ、まちづくりを推進していくことを大いに期待する。



28.

多くの人々が来たことに驚いた。市民協働が出来る気がした。お茶の販売方法を確立する。若い人が中心で生活できる茶農家にする。住みつつけるには？

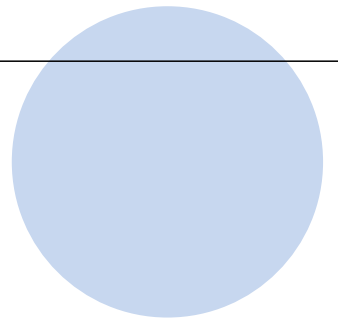
29.

地域として、狭い意見(に)、若い・新しい発想を入れることが可能となる。現在の「絆づくり事業」の中に、是非、反映して行ければ良いと思う。期待をしている。

30.

若い人の力で未来は確実に良くなる!! 行政は若い人が地元に戻ってきやすくなる環境整備を!!(雇用・子育て、等)





■地域か県大関係者かどちらか不明

31.

地域での地元の活動内容などを伺いつつ、「これからの牧之原」を想い描いた。県大生がデータや分析などを加えてくれたら、うれしい。地元親交→全国区へ 厳しいこともあるけど、一緒にがんばりましょう——!!
“本音をきける関係づくり”

32.

牧之原の地域活動の一端を知ることができた。いろいろな人が集まって、意見交換をすることがコミュニティの活性化の原点。ここの地域は都会ではない。田舎の魅力を再発見情報発信していくために県立大学とのコラボは有効。COC プロジェクトの力を発揮できる。

33.

この事業やこのつながりが牧之原市民に広く伝わるとういな。と思います。とても魅力ある会になったので、第2回第3回・・・とつなげていきたい。そして、自分にできることを少しずつやっていきたい。

34.

学生がこれから自分で考え、行動していく為に、地域を知ってもらい、地域の為に、社会資源となってもらいたい。



35.

自分とは全然違う視点、考えの人たちと意見交換できてすごくよかった。

36.

高校生や大学生が牧之原について、積極的に行動し、地域の人の意見がみんなに伝わるように、一人一人が動いていかなければならないと、感じました。

37.

情報発信(対地元)はまだ不足ではないかな。例:子ども参加—学生、男性不参加。(もっと深刻に取り組む必要がある)データにこだわるのは、全体にできたとは言えないのでは。地域の人たちの要望、注目すべき。



■大学関係者(教員・学生)と思われる方

38.

市民力の高さを感じた。やさしさ。気配り。市長さんの活力・巧みな戦略性・人柄。牧之原のポテンシャルの高さを認識。市民力・自然・風土。産業。



39.

学生×牧之原 地域を知ってもらい人とつながることで、牧之原の人では気づかない新たな視点で魅力を磨けると思うので、非常に楽しみです。

40.

研究機関である大学が地域と協力し、問題発見及びその解決の為に政策提言に努めてゆくことが重要。実学をもって地域に貢献することが重要。



41.

地域の方と直接話しができて良かった。ワークショップ、全然、話し足りない。

42.

第一回目のCOCには、大勢の参加と又、色々な意見が出て、楽しく時間を過ごしました。牧之原市に県大生の若い力が導入され、又、学生にも地域の生の生活をありのままに見てもらい、共に共育していくことは、すばらしいと思います。ゴールへの着地点へのトライアルはこれから種々にチャレンジしていくことになると思いますが、4年後の姿をイメージしながらやっていければと思います。



43.

若者が、街づくりに参加していく数は、静岡市より多い気がする。牧之原は、大家族が多く、地域とのつながりが多いから、若者も地域とのかわりがある。他の地域でも、地域とのつながりが増えれば、まちづくりに参加をして、若者が地域に残るのではないかと。Citizenship



44.

若い人の積極的な発言に感激した。日本の未来は明るい!県大生(若者)大いに発言していこう!

45.

現場に来て、ワークショップを行うことにより、地元の知らなかった話を聞けた。それらをもとに、色々なアイデアが出た。学生と共育を進めるキックオフが出来た。

46.

いろいろな人と話すことで、いろいろとできそうなことがあるような気がします。大学って何をしているところかは、わかりにくいと思うので、大学は何ができるかは、伝えていかなくてはいけないと思いました。



47.

牧之原の人々が、地域を思う熱い気持ちを感じました。県大生として、何か地域を盛り上げる企画や活動をしていきたいと思っています。本日の話し合いで学んだことを牧之原だけでなく、様々な地域とのつながりをつくるために、生かしていきたいと思いました。このイベントに参加して心から良かったと思います。地域を盛り上げるためにも、私にできることなら、何でも協力したいと思います!!!

「相良港に“宝船”がやってきた！」 参加者の感想集

● 気づきのきっかけ

坪池 洋
牧之原市教育長

ワークショップの最後に嬉々と話された年配の方の言葉が印象に残っています。

「大学生や高校生と話をしたのは初めてだよ。こんな話し合いができるなんて思ってもいなかった。」

この方は、もっと牧之原市の先の可能性を考えたいね、と前向きな発言もされていました。

県立大学との協働事業が市にもたらすのは、多岐に亘ると思いますが、県大生が市民と触れ合うこと自体、意

味を持つということがわかります。さらに具体的には、市民自身が“牧之原市のよさ”を、外部の人の、それも若者の視点からの指摘で見直したり気づいたりする機会にもなっていました。

人にとって、考えを変えたり気づいたりすることは簡単なことではありませんが、本イベントは確かにそのきっかけづくりに寄与したと感じています。

● どんな GOAL を めざすのか

中川松枝
多目的スペース「凧・百花春」

今、まさに牧之原みらい交流サテライトからキックオフされたボールは、市民×学生の力でゴールをめざしているという心地よい風を、参加者のひとりとして感じた。

第一部のトークセッションや講演、パネルディスカッションも興味深い内容であった。特に、鬼頭県大学長の歴史人口学からみたライフサイクルと幸福度など、視点を変えてのお話は未来に明るさを感じた。

第二部ワークショップ（「対話タイム」）では、学生の

活躍している姿がみられた。

ただ、課題も山積している。参加者は、市民、学生のごくごく一部である。もっと市民、学生を動かすには、どうすればよいか。どうなることが GOAL なのか。みえてこない。

ボールがもっと大勢の市民と学生に繋がり、得点となることを期待している。ひとりのサポーターとして、今後も応援していきたい。

● 「相良港に“宝船”が やってきた！」

大石吉彦
牧之原市菟間地区・地区長

牧之原市には大学がなく、大学生に接する機会が皆無ですが、今回のイベントでは、第二部「対話タイム」で、大学生と話をすることができました。企画が斬新で興味深いイベントでした。

しかも、その大学生たちは、地元の人が全く気づかない牧之原の魅力、例えば、太陽だったり、風だったり、自然や食の豊かさについて、宝物だと、言ってくれて、い

わば、貴重な“情報”を運んで来てくれたのです。それで、私は、相良港に“宝船”が来たようだ、最後に発言した次第です。

小さい市ですが、市長のまちづくり先導のもと、市民協働の神輿に市民を乗せて、未来に向けて船出するところで、特に、まちづくりの分野で、COC 事業とのコラボができれば、すばらしいと考えます。

● 地（知）の拠点 COC 事業 キックオフ イベントに参加して —縦軸から横軸へ

森田 武
牧之原市菟間地区・地区長

COC 事業は、市長から聞いていたが、個人的にはそれほど関心はなかった。

4月から新地区長の課題は、「絆づくり事業で2年間練り上げた取組みを実行に移し、菟間地区の「絆」をしっかり育てること」にあった。

月1回の取組みには、大学の先生や研究機関の연구원も見学に見えられて、取組み状況をつぶさにご覧になってご挨拶もいただいています。その中であって、コーディネーターの東先生は、いきなり「一つのチームの中に参加」されて、毎回メンバーと一緒に課題解決に向けて取組まれています。東先生の手法には正直驚きました。目線をメンバーにしっかり合わせ、同じ行動の中から共に結論を導き出す取組み姿勢に感激しました。この先生の関わるイベントであれば、ぜひ、参加しようと思ひ参加しました。

私は正真正銘の「団塊の世代」。現役中は仕事優先、頑張るだけ頑張る。退職後「横の繋がり、幅広さ」の楽

しさは実感していますが、ものの見方・考え方は「縦軸、深掘り」を続けてきました。

大学・学生も「学業に集中して、研鑽、自らをさらに深めていく」ことが本分との思いが強くありました。しかし、このイベント参加で、縦軸だけでなく横軸の大切さも感じたように思います。

第二部の「えんたくん」を囲んでの学生との意見交換では、「起業を目指す学生、NPOで活動中の学生、公共交通の必要性を訴える学生」の声を聞いたとき、「いっしょにやることはいっぱいある」と、そんな気持ちになったイベントでした。

お互いに「何かしてもらえる」のではなく、それぞれの立場で「精一杯頑張っている」学生と地域の人たちが交流し、意見を出し合い、ぶっつけ合うことで相乗効果が生まれる。そんな取組みになるのではないかと期待が膨らむ一日となりました。

● COC のイベント参加で 得られたこと

先生なつみ

県立相良高校 3年生

私がこのイベントで一番印象に残ったのは、第二部のワークショップです。大学生の進行ということでも身近に感じられ、良い雰囲気話し合うことができました。

話し合いでは、「えんたくん」を使い、幅広い年齢層の方々と楽しく対話ことができました。あるグループで、私が「牧之原市には、自分の地元を一番だと自慢する高校生がたくさんいるんです。」と話すと、同じグループだった方が「それは本当に嬉しい。君のおかげですごく元気が

が出たよ、ありがとう。」と、とても喜んでくれて、このイベントに参加できて本当に良かったと感じることができました。また、それと同時に地域の未来について多くの方がたくさんのことを考えてくれていると知り、とても嬉しかったです。若い世代の私たちが将来の町づくりについて考える貴重な体験になりました。また、このような機会があれば、ぜひ参加させていただきたいと思います。

● 初めての COC

森田利貴

県立相良高校 3年生

私はこのキックオフイベントについて何も知らないまま参加しました。そのため、最初はとても不安で胸がいっぱいでした。

第二部の「会話タイム」では、初対面のしかも自分の親くらいの年齢の方と会話をするのはとても緊張しました。しかし、実際に話などをしてみるとみなさんとても優しくしてくださったのですぐに緊張も解けていきました。そして様々な立場、年齢の方の意見や考え思いを聴くことができ自分の視野を広げることができました。

そんな、とても楽しい時間だったのであつという間に過ぎてしまい少し残念だったです。また、休憩の時間には鬼頭学長と直接お話することができました。人口の停滞と外からの変化による発展を聞いて自分が全く考えたこともないことがつながっていて驚きました。そして今の停滞は今度何によって発展に行くのかと考えたらワクワクしました。多分、私はそれは情報ではないかと思えます。

● 私自身にできること

加藤美季

県立榛原高校 3年生

今回初めてこのようなイベントがあることを知り、少し不安もありつつ参加しました。

でも、実際は、全く堅苦しい話ではなく、地元の方々や先生方、県大生など、たくさんの方々とお話することができ、とても楽しかったです。

このイベントで、他の人に「○○○してほしい」と頼むのではなく、『自分自身に何ができるか』を考える大切さを学びました。そして、思っていた以上に多くの人

が私たち若者の力を必要としていることがわかりました。これからの牧之原市・静岡県・日本を支えていく若者の一員として、様々な課題を自分自身のこととして考え、よりよいものをつくりあげていきたいと感じました。今の私にできることは、こういったイベントなどで、意見を言うことだと思うので、これからも積極的にたくさんの人と話をしていきたいです。

● 土と風の出会い

下村武治

県立榛原高校・教諭

生産人口の減少や老年人口の増加とそれに伴う諸問題は、牧之原市だけでなく日本全体の大きな問題である。何年か先には多くの地方自治体が消滅するとも言われている。そんな中で、大学とのコラボレーションによる町興いで活気を取り戻している自治体の話を耳にする。地元の人には見えにくいものが、学生というフィルターを通したとき、新しい価値観の発見に繋がることもあるようだ。

いつもは遠くのどこかで行われていることが、牧之原市と静岡県立大学の共同事業として行われることに大きな期待と興奮を抱きキックオフイベントに参加した。これが大きなねりとなることを願いつつ、確かに土と風の融合が始まったことは確認できた。私が積極的に参加することはもちろんだが、多くの高校生の参加を促すことが私の大きな使命であると自覚し、若い世代の成長を期待したい。

● COC 事業と牧之原市民 による協働の可能性

今野剛也

牧之原市商工会青年部 2015 年度部長

はじめに、このような機会に参加させて頂き、ありがとうございました。普段、同世代 や同じ団体内での話し合いなどは行っていますが、今回の対話では 現役の県大生を始め、世代、分野を超えた市民の皆さまの意見も聞くことができ、楽しく有意義な時間を過ごすことが出来ました 今後も 今回の対話のように県大生と牧之原市民が膝を突き合わせ 話し合いを重ねることで、人と

人とのつながりを強くし 牧之原市の問題や魅力について より良く知ってもらい、学生ならではの柔軟で自由な考えと新たな視点で問題解決や、魅力を磨けるのではないかと可能性を感じることができました。 県大生と多くの市民を巻き込んで、魅力あふれる牧之原市になるように協働していきましょう。

● 再発見！地域と農業の 魅力・役割

藤田健一郎

J Aハイナン営農経済部営農企画課・
青壮年部事務局

若手農業者で組織するJ Aハイナン青壮年部では、食と農の大切さを伝えるための「食農教育活動」を長く行なっています。活動の結果がわかりにくいなかで、それでも地域の子供たちの為に地道に活動しています。ワークショップにて高校生から「小さい時から地域の方々に、牧之原市の食の大切さを教えてもらった。牧之原市には教えてもらう環境があること、大切にしたい食があることが魅力です。」との意見を聞き、私たちの想いがしつ

かりと伝わっていることがわかり感動しました。また、提供させていただいた「望」冷茶が幅広い方々に好評であったことも、生産者として嬉しい限りです。牧之原市の魅力として「自然」や「緑」、「茶畑」との意見を多くの人からお聞きしました。農業者が担うべく部分が多く、農産物を生産するだけではなく農業の魅力や役割を改めて感じました。

● キックオフイベントに 参加して

片瀬紀子

みらい子育てネット事務局

キックオフイベントに参加させていただきありがとうございます。様々な年齢層の方々の参加にワクワクでした。そして市内だけでなく市外からの市民の参加もあったと聞きビックリ！県立大学のCOC事業に期待をして集まって来ているんだなあ…と感じました。

牧之原市になって10年の歩みを振り返りながら、自分が関わっている子育て中のママ達と、県立大学とこれから一緒に何が出来るか…をテーマ毎に、「えんたくん(テーブル)」をチェンジして考えて伝えていきました。

いろいろな立場の方々から、自分とは違う価値観や考えを知る事ができ、とても新鮮でした。

今回、私達の活動中の託児サークルにお子様を預けられた方と一緒にテーブルになった時に、「子どもがすぐに打ち解けてとても良かったです」と言われて、こちらもうれしく思いました。このサークルも10年前の「フォーラムまきのはら」から立ち上がったサークルです。

これからもいろいろな出会いやつながりを大事にして、活動を広げていきたいと思いました。

● COC 牧之原サテライト に参加して

藤浦美芳

牧之原市川崎区在住・会社員

私は、この度の「牧之原サテライト」は一体どの様な形式でCOC事業を進めていくのか興味を持ち参加致しました。

キックオフの当日は、一部での大学・行政側からの基調講演に続き、二部では全員参加して「市民と大学が一緒になって、どんな牧之原市にしたいか」のテーマで話し合いをしました。

このワークショップでは、あらかじめ用意されたテーマを県大生のファシリテーターが進行役をして、白熱した対話ができ、有意義な楽しい時間を過ごす事ができました。

円形のダンボールに考えを書いたり、テーマ毎にメンバーチェンジをして意見交換したりする中で、教育・福

祉・農業・経済など 様々な分野の皆さんの考え方を聞き「ああ、そういう思いがあるんだなあ」、と気付かされたりもしました。

参加してみて、県立大学の専門知識を持った若い学生さんのエネルギーと地域の中で長く活動している経験者の体験と知恵を持って協力していけば何か大きな波が起こるのではと予感致しました。

牧之原市の一市民として今後に望むことは、特に地場産業の茶業の復活や又それに代わる新しい産業起こしに県立大学の力をお借りして、若い人達の夢の持てる牧之原市になっていったら嬉しいです。

当日を迎えるにあたり関係者の皆さんの準備に感謝し、今後の共有に期待を寄せます。

● しあわせの種まき

渡辺美穂子

カメハメハ王国 NGO in 牧之原

県大COC 牧之原サテライトの東様からお誘い頂き、7月12日「キックオフイベント」なるものに参加させて頂きました。短時間の中で盛りだくさんの内容があり、会場内での移動も含め忙しいイベントでしたが、終わってみれば楽しい余韻の残るイベントで、この日、参加できてラッキーでした。

この日、大学生の皆さんと、また市内でもなかなか一緒に出来ない方たちとともに語った対話タイムは、とて

も新鮮な風を感じました。

今年は、須々木の海岸にアカウミガメがさっぱり来なくて寂しい限りですが、牧之原市のみらいを共に考えて下さる大学の皆さんに出会えてとても心強く、これからはとても楽しみになりました。なんだか、エネルギーを充電できた1日でした。

これからもどうぞ、よろしくお願いします！！

● 「人をつくり、未来をつくる in 牧之原」に参加して

山本禮一・横山真一

山本和弘・岡垣美保子

NPO法人「勝間田塾」

代表4人が参加して、感じた事を2点記す。

(1) 第一部の鬼頭学長の講演で、日本列島の人口変動について、4つの減退期、①縄文後半、②平安～鎌倉、③江戸後半、④2005年以降、が指摘された。それらの人口減退と克服の具体的内容が何だったのか、もっと詳細を知りたかった。きっとそこに、現在の文明の衰退や人口減少を克服するヒントがあるのではないだろうか？
(2) 第二部では、何回か異なるグループに分かれて、

参加者の考えを出し合った。その考えを今後どうするのか？話し合って終わりとするのではないと思うが、参加者はもちろんの事、牧之原市が真っ先に取組むべきことは何か？市民全員が行動できる事柄から取り組みたい。例えば、毎晩出会った人に必ず声掛けをすれば、そこに明るい絆が生まれるだろう。これは、一例に過ぎないが、即刻実行可能な事から行動を起こそうではないか。

● 人をつくり 未来をつくる in 牧之原 視覚障がい者として

中島和哉

牧之原市社会福祉協議会 地域福祉課

今回のイベントでは、支援者が1人ついて、手引きやアンケートの代筆といった補助をしていただきました。

第1部の講演、スピーチ、パネルディスカッション、事業説明では、手元の資料の见ているページと話の内容がずれると話についていくことが難しくなります。ですから、講演などの進行と並行するかたちで支援者の方が手元の資料のページ案内をしていただき助かりました。

第2部の2度目からの対話タイムでは、移動先のテーブルで先ほどまでどういった話をしていたのかを知るために、移動した先のテーブルに書かれている内容を把握する時間が欲しかったです。こういった時間を確保することで、新しい意見を出せるようになります。今回は、

最初に話をした方の意見に対し私自身の意見を加えた発言をしました。こういったことで、2回目以降の対話タイムでは、ほぼ相槌を打つだけになりました。

今回は、視覚障がい者の参加者は私だけでしたが、こういったイベントには、他の障がい者の方も是非参加していただきたいです。なぜならば、障がい者にとって地域の環境や周囲の方の理解度は生活するうえで重要な事だからです。障がい者は、手引き、代筆、手話などの自分に必要な支援を受けることができれば、こういったイベントへの参加を前向きに考えるようになるため、牧之原の未来のために障がい者に優しい街になればと思いました。

● 若者が活躍できる場に

水島滉大

(静岡県立大学経営情報学部3年、
YEC(若者エンパワメント委員会)代表)

私は静岡県立大学のYECという団体で、若者の社会参画を促す活動をしている。今回私がCOC牧之原サテライトのキックオフに参加したのは、若者の力が社会で生かされる場になるのではないかと期待していたからである。

キックオフイベントには、私たち大学生はもちろん、高校生や学校の先生、行政職員や地域で活動をしている方が100人以上集まったのワールドカフェが行なわれ、立場を超えて地域について話す場は刺激的であった。

今後のまちづくりに求められるのは、多世代の参画であると私は考えている。同じまちへの意見でも、年齢や立場が違えば全く異なった考えが出てくる。人口流出が問題視されている中、特に、現在も地域の一員であり、今後の地域を担っていく存在である若者が、魅力的で住み続けたいと思う地域の姿を思い描き、社会と共に創造していくことが重要である。今回は、若者たちと一緒にキックオフができた、意義ある第一歩であったと感じている。

● 学生ファシリテーター として

井上美樹

静岡県立大学 国際関係学部2年、
POC代表

私は今回の牧之原キックオフサテライトの第二部に、学生ファシリテーターを務めました。

私は普段からワークショップを作ったり、ファシリテーターとなることはあったのですが、80人規模のワークショップのファシリテーターとなるのは未知数に近く、良い経験になりました。牧之原市の現状を知り、牧之原市民に寄り添いながら、学生からの視点も交えてファシリテートするというのが、何よりも難しかったです。「えんたくん」や折り鶴(トークンオブジェクト)の

お陰で、学生と大人が同じ空間、同じグループにいることにも違和感を感じなくなりました。感想共有タイムにて、牧之原市民の方々が、学生の存在を尊く思ってくださっているというのが分かったことが、なにより嬉しかったです。いよいよCOC事業が本格的に動き出すんだなあという実感を覚えました。このキックオフイベントは、あくまで「スタート」です。大学と地域が継続的に連携することで、明るい未来が訪れると良いと思っています。

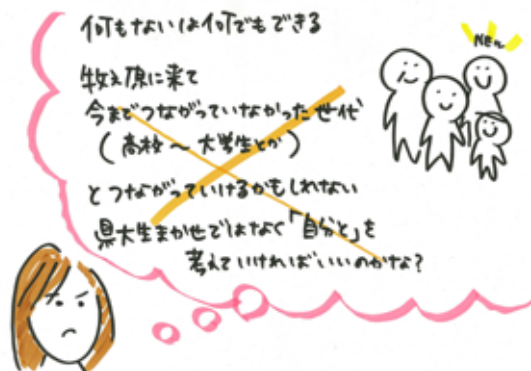
● 何もない可能性

絹村亜佐子

牧之原市 グラフィックアー

県大生とつながることで、「自分」の出来ることも幅が広がる、それは、「私」だけじゃなくて、みんなにとってもそうなのかなあと感じました。

そしてそれは、「何でも出来る」可能性にあふれているのかもしれないと思います。



● 絆づくり事業とCOC事業の コラボレーション

坂口和巳

牧之原市まちづくり
協働ファシリテーター

牧之原市では10の小学校地区にて「地域の絆づくり事業（協働）」を展開しています。昨年度までに4地区がスタートしており、今年度は残りの6地区が策定委員会を設置し話し合いがスタートしました。

今年度の事業は昨年度までと少し違い、策定委員の年齢層を20代から30代までとして、若者に「絆づくり事業」の内容を考えてもらう事です。そして話し合いのプログラムや会議の運営もまた別の若者が実行している事です。ここにCOC事業とのコラボが出来れば、牧之原市外の若者が加わる事が出来れば、市内外から牧之原市を見て考える事が出来れば、若者同士の話し合いで化学反応が起れば、見慣れ形骸化してしまった色々な事に必ず新しい芽が生まれてくるはずですよ。

海外に出かけた人が、日本を見つめ直すとなりに判ることが多いとよく言われます。海外にでて新しい価値観を体験するからです。

キックオフ・イベントの時、地区長さんが「宝船がきた！」と言われました。これは牧之原市民が市内に生活しながら、若い新しい価値観を体験する大きな機会を得た事を表した言葉ではないでしょうか。この様な大きな機会はそうそう有りません。どの様な形で、どの様な手続きで、どの様にしたら両事業をコラボレーション出来るかをしっかり話し合い、実際に各地域で実践してみる。そうすれば両事業にとって、最高の成果を得られるのではないのでしょうか。そして、そうなることを私は切に期待しています。

● 大学生が牧之原市に 来てくれて嬉しかった

武田道哉

牧之原市 市民ファシリテーター

『牧之原市に、大学が来てくれている。それも、大学の部分的な「機能」のみならず、大勢の大学生が、牧之原市に来てくれている』

私が今回、一番嬉しく思いましたのは、上記のような事です。

実は、私の市内の知人たちは、「子どもを大学にやる意味がわからない」という意見の持ち主がかなりいました。それもしょうがないなとあきらめの心境だったのですが、今回、大勢の大学生の皆さんと話しまして、心境

が変わりました。今は、COC事業を通して素晴らしい大学生とたくさん会えば、知人たちの意見も変わるのではないかと期待しています。

また、第二部の「ワークショップ」では、大学生の皆さんの主導で、立場や世代を超えた話し合いの場があったという間に演出されていったのが心地よかったです。こういう場が何度か成立すれば、牧之原市は大いに良い方向に変わっていくと、明るい気持ちになりました。参加してとても良かったと思っています。

● COCキックオフイベント に参加して感じたこと

本間直樹

牧之原市役所政策協働部地域創生課

第一部では、COC事業の概要が良く理解できました。特に、津富先生の講演は、県大の熱心な姿勢と本気度が伝わってきました。今後、牧之原市とどのように関わっていくのかなはこれからと思いますが、相互の利点を活かし、まちの発展に繋がるような連携を進めていきたいと感じました。

第二部では、学生が主体的にかつ前向きに企画し、進行していた点は良かったと思います。市民では気づけないようなまちの良さを再発見し、それを具体化するための力として若者の存在に期待しているという意見が多かったなと思いますので、早期に具体的な活動に繋げ、今回共有した想い等を市民に可視化してもらいたいです。

● お待ちしています！

宮崎真菜

牧之原市役所政策協働部地域創生課
／平成27年3月県大卒業

大学が身近にない牧之原において、今回、県大の先生のお話を聴けたり学生とともに時間を過ごすことができたという事は、とても新鮮で刺激的だったのではないかと感じます。私自身は、学生が牧之原に来てくれるだけでとても嬉しかったです。あのような時間や繋がりが、これからもどんどん増えていったら素敵だと思います。学生さんとお話しながら自分自身の学生時代を振り返っていましたが、大学の外に出会いや学びの機会がたくさん

あることは幸せだったなぁと感じます。牧之原が、学生の力を発揮でき出合いを大切にする場所になっていけたら嬉しいです。学生と共に地域を磨き、地域と共に学生を応援していきたいです。学生のみならず、いつでもお待ちしておりますので、気楽に足を運んでください！（なにぶん交通アクセスが悪いですが、声を掛けてくれたら駅まで迎えに行きますよー！）

7月12日の様子は、静岡県立大学テレビが動画にまとめてくれています。以下のURLから、ご覧ください。
(1本目) 牧之原サテライト キックオフイベント (ダイジェスト編) <http://ustv.u-shizuoka-ken.ac.jp/zc-ojp2nkys/>
(2本目) 牧之原サテライト キックオフイベント (インタビュー編) <http://ustv.u-shizuoka-ken.ac.jp/rt5yqicfsom/>

静岡県立大学「ふじのくに」みらい共育センター
牧之原サテライト キックオフ・イベント

人をつくり未来をつくる in 牧之原

報告集 「相良港に宝船がやってきた！」

発行 静岡県立大学 COC 事業 「ふじのくに」みらい共育センター

〒422-8526 静岡県静岡市駿河区谷田 52-1

TEL: 054-264-5441 FAX: 054-264-5441

E-mail: shizuoka-coc@u-shizuoka-ken.ac.jp

編集 静岡県立大学 COC 事業 牧之原みらい交流サテライト

〒421-0495 静岡県牧之原市静波 447-1

牧之原市役所（榛原庁舎 6 階）

TEL: 0548-23-0066 FAX: 0548-23-0069

E-mail: azuma.coc@u-shizuoka-ken.ac.jp

発行日 2015 年 10 月 1 日

この報告集をご入用の方は、「牧之原みらい交流サテライト」にお問合せください。
